

「かけがえのない命を守るために」

愛南町立柏小学校 6年 木口 凱喜^{きぐち かづき}

ぼくの住んでいる柏地区は、海に近く、南海トラフ巨大地震が起こったら、校区で一番早く津波が来ると言われています。そのため、津波に備えることはとても大事ですが、ぼくたちの地域には、もう一つ大きな心配があります。それは土砂災害です。

柏地区には、山のしゃ面や川が多く、土石流警かい区域やがけくずれが起きやすい区域に指定されている場所がたくさんあります。大雨や大きなゆれのとき、山の石がきがくずれてしまうのではないかと、とても不安になります。実さいに地域探検で山の道を歩いたとき、石がきを見て、大きな地しんが来たらくずれるかもしれないと思いました。

そんなぼくたちを守ってくれているのが、砂防ダムです。柏地区には二段にわたって砂防ダムがあり、山から流れてくる土や石、大きな木を止めて、地区を守ってくれています。ぼくたちの学校では、県庁や土木事務所の方に来ていただき、砂防学習会を行うことがあります。模型や3Dシアターを使った学習を通して、砂防ダムの仕組みや大切さを学ぶことができます。

土木事務所の方からは、ドローンでとった砂防ダムの映像を見せていただいたこともあります。ふ段は見ることでできない角度から自分たちの地区を守るダムの姿を見ることができました。そのとき、このダムがあるからぼくたちの家は守られているんだと強く感じました。祖父も、

「ダムができてからは、少し安心できた。」
と話していました。大雨のときに川の水が増えても、思ったほどにごっていないのは、ダムが土砂を止めてくれているからだと思います。

でも、砂防ダムがあるからといって、安心しすぎはいけません。ぼくの家裏山はコンクリートで固められています。水ぬき穴からにごった水が出てきたら、すぐに避難するようにとされています。また、地区にある内海支所は、風水害のときの一時避難場所になっていて、もしものときは、防災無線で避難の呼びかけがあるそうです。だから、家族と「どこへ逃げるか」「どうやって逃げるか」を話し合っておくことが、命を守るために大切なのです。

ぼくたちは地域探検の後、「防災マップ」を作りました。土砂災害については、危ない区域を黄色や赤のセロファンではりつけ、だれが見ても分かりやすいようにしました。みんなで協力して作ったマップを見て、地域の人の役に立つことができたかなと思いました。

防災学習を通して分かったのは、「自然災害は必ず起こる」ということです。津波も土砂災害も、人の力で止めることはできません。でも、被害を小さくするためにできることは、たくさんあります。砂防ダムのようなし設を整えることも大事ですが、ぼくたち一人一人が「もしもの時にどう行動するか」を考えておくことが、一番大切なことだと思います。

ぼくは、防災学習を通して、ぼくたち子どもにもできることがあることに気づきました。それは、学んだことを家族や地域の人に伝えることです。雨が強くなったら早めに逃げようとか、川や山の様子に気をつけようと声をかけ合うだけでも、災害に対する気持ちは高まります。また、家で防災バックを用意したり、防災倉庫にどんな物があったらよいか考えたりすることもできます。

近いしょう来、大きな地しんや大雨が必ずやって来ます。そのときに柏地区のみんなが無事でいられるように、砂防ダムを大切にしながら、地域で支え合い、備えていきたいです。そして、土砂災害からも津波からも、かけがえのない命を守れるように、これからもしっかりと学び、行動していきたいです。

「災害」の二文字は命のサイレン

松山市立三津浜中学校 2年 ^{こうの}河野 ^{こそら}心空

「ピロリロリン、ピロリロリン。」

真夜中に幾度となく鳴る警報音。胸の奥底がざわつく得体の知れない不安。今にも屋根が落ちてきそうな地響きを立てる大きな雨音。

朝になり、両親の慌てた声で目が覚めた。家に隣接する線路が水に浸かり、大通りに面する店舗の一部が床下浸水していた。当時小学1年生だった私は、事の重大さが分からず野次馬のごとく2階の窓から見渡すと、見慣れた風景が一変していた。隣町では、土砂崩れが発生し、家屋の被害まで出ていたことも後に知った。行き来する緊急車両、テレビで見た光景は幼心にも大変ショックを受けた。

「この間遊びに行った公園の近くだ。怖いな。雨だけでこんなに変わっちゃうんだな。」

この時初めて、災害は人事ではないという命への危機感が生まれた。

この出来事は、西日本豪雨として多くの教訓を残している。

近年、ヒートアイランド現象や線状降水帯の影響からか「集中豪雨」という言葉を日常でよく耳にするようになったと感じる。

令和6年7月、松山城の東斜面でまたしても土砂崩れが発生した。大量の土砂が住宅地に流れこみ、尊い命も奪われた。

この場所は、私の大好きな大叔母が毎朝、ウォーキングをしているコースであり、姉の通学路のすぐ側だったため私はゾットした。

さらに同年11月、「記録的短時間大雨情報」が発表され、「緊急安全確保」までも発令された。この時私は、学校の文化祭の真っ最中だったため、いつもとは桁違いの雨音とは感じてはいたが災害級の大雨だとは知らなかった。

松山市では、松山城での災害を教訓として特に、土砂災害に対する警戒から避難の早期化、情報収集の重要性、防災訓練の実施を進めていたため、迅速な判断や指示出しに繋がることができていた。

土砂災害は、人命や人々の財産を容赦なく奪っていく。天気予報等で事前の予測はされていても、「いつ」「どこで」「どのような規模で」発生するのか分からない。

危険と安全は紙一重であり、人はどれだけ技術が進んでも自然災害をくい止めることは出来ない。いかに防止策を講ずるかが命を守る鍵だと再認識した。そこで、社会科の防災学習で学び、印象に残っていた「三助」を柱として自分なりに考えてみた。

1つ目は、自分の命は自分で守る、家族の命も守る「自助」だ。家族が一緒にいる時に起こるとは限らないのが災害だ。まず家族会議を開き、災害時の連絡手段、合流場所の確認を行い、地域の危険箇所の把握をハザードマップで行った。特に、土砂災害警戒区域の確認や避難場所、避難経路を地図を用いて具体的に見直した。すると、自宅から緊急避難場所まで徒歩5分、最寄りの指定避難場所までは徒歩15分かかることが分かった。

しかし、これは最短ルートを利用した場合の移動時間である。実際、前述の災害時には隣接する線路の遮断機が降りたまま、警告音がなり続き渡れる状況ではなかったもので、遠回りを余儀なくされる可能性が高い。また、祖父母と同居しているため、より早めな避難開始が必須だ。

次に、防災非常袋の中身のチェックをした。主に、水と非常食の消費期限の確認やオールシーズン対応の生活必需品の追加を行い、置き場所も全員で共有した。

2つ目は、地域や近隣住民と協力し、互いに助け合う「共助」だ。これまでに地域の防災訓練に参加したことで避難経路の確認や避難方法の実践、応急手当ての方法、簡易トイレの作り方を学び、地区の集会所の備蓄品の種類と保管場所も把握しているので、避難時には周りの人に伝達して役立てたい。

それ以前に大切なのは、日頃から近所の人とのコミュニケーションを図り、積極的に挨拶を交わし顔なじみになっておくことだ。避難の際には声をかけ合い、出遅れや置き去りをゼロにするためだ。

3つ目は、行政や公的機関による救助、援助、支援を提供する「公助」だ。私は、松山市の防災アプリをスマートフォンに入れ、最新情報を入手できるようにしている。そのため充電残量をこまめにチェックし備えている。

以上のことから、避難する際にはためらわず、即行動することが命を守る第一歩である。

やはり、大事なことは「自分の身は自分で守る」、「定期的な家族会議の開催」、「近所の人と顔を見える関係を築く」これらのことを常に念頭に置き、少しでも命が助かる可能性が高い行動に移せる糧としたい。

自分は大丈夫、という油断や思い込みを捨て、あの時こうしていればという後悔だけはしないよう、落ち着いた判断能力を培い、一番貴重な『命』を守りたい。

「命を守るために」

松山市立南中学校 2年 ^{もりおか} 森岡 ^{りん} 凜

僕が土砂災害について本当に「怖い」と感じるようになったのは、平成30年の西日本豪雨のニュースを見た時です。テレビの映像には、茶色く濁った土砂が住宅地に流れ込み家が壊れ、道路が寸断され、人々が避難所で不安そうに過ごしている様子が映っていました。あれが日本で、しかも自分の住んでいる県で起きていたということがすごく衝撃的でした。

西日本豪雨は2018年7月に梅雨前線の影響で広い範囲にわたって大雨が降り続いた災害です。特に広島県、岡山県、愛媛県で記録的な大雨になり、多くの土砂災害や川の氾濫が起きました。たくさんの人の命が奪われ住む家を失った人もいました。僕はその時まだ小学生でしたが、「雨ってこんなに怖いものなんだ」と感じたことを今でも覚えています。

僕の祖母の家は山の近くにありますが、いつもは静かで自然豊かな場所ですが、大雨の時は土砂災害の危険があると聞いています。祖母は「昔から山は怖い所で、雨の日は注意が必要だよ。」と話してくれました。僕は祖母の話聞いて、災害は遠い話ではなく、身近な問題だと実感しました。

学校の授業で土砂災害についてくわしく調べる事がありました。土砂災害には主に、がけ崩れ、地すべり、土石流の3種類があり、大雨や地震がきっかけで発生することが多いそうです。西日本豪雨の時も、山のしゃ面が崩れて家の中に土砂が流れ込んだり、道路が寸断されたりして、多くの人が逃げ遅れました。

僕の住んでいる地域には大きな川があるので「もしかしたら、同じようなことが起きるかもしれない」と思うようになりました。今まで「うちは大丈夫だろう」と他人ごとのように思っていたけれど、西日本豪雨のような災害は、どこでも起こる可能性があることを知り、災害を自分ごととして考えるようになりました。

まず僕がしたことは、祖母の家の周りのハザードマップを調べることでした。市のホームページを見てみると、僕の祖母の家の近くにも、「土砂災害警戒区域」と書いている場所を見つけました。祖母といっしょに避難場所や避難経路を確認し、「夜に避難する場合はどうするか」や「雨が強まってきたら、どのタイミングで避難を始めるか」など、いろいろなことを話し合いました。

また、僕のスマートフォンには気象庁の防災アプリが入っていて、警報が出た時に、すぐ通知が来るようになっています。このアプリを使って警報や避難経路を確認するようにしています。特に警戒レベル3やレベル4の時は災害がせまっていて、命に関わる大切なサインだと思いました。

ニュースで見た被災地の人の話の中に、「もっと早く逃げていればよかった。」という言葉がありました。僕はその言葉が印象に残っています。災害はいつ、どこで、どんなタイミングで起こるか分かりません。だからこそ、「まだ大丈夫」と考え行動しないのではなく、「念のために早めに行動する」ことが命を守る大切なことなんだと強く感じました。

さらに、地域の人たちとのつながりも大切だと思います。もし災害が起きたとき、一人で避難するのがむずかしいお年寄りや子供、体の不自由な方がいたら、周りの人が声をかけて助け合わなければいけません。僕自身は、まだ中学生なので、できることは少ないかもしれませんが、避難所でのマナーや災害時のルールなど、知っておくだけでも役に立てることはあるはずです。

土砂災害は、自然の力によって起こるものですが、防ぐことは人間でもできることがたくさんあると思います。砂防ダムやがけ崩れ防止のさく、排水工事など、国や県が行っている対策に加えて、自分たち一人一人が「もしも」を考えて準備しておくことが、最大の防災になると思います。

これからは、天気予報をよく見るようにしたり、地域の避難訓練に積極的に参加したり自分なりにできることを増やしていきたいと思います。西日本豪雨のような大きな災害を二度とくり返さないために、日ごろからの備えがとても大切だということを忘れずに生活していきたいです。